

国指定史跡 棚底城跡Ⅵ
令和元・2年度調査
(第7次発掘・石積悉皆調査)

2022

天草市教育委員会

国指定史跡 棚底城跡VI
令和元・2年度調査
(第7次発掘・石積悉皆調査)

2022

天草市教育委員会

序 文

本書は、国指定史跡「棚底城跡」において令和元・2年度に実施した第7次発掘調査と石積悉皆調査の成果をまとめた報告書です。

棚底城跡は上津浦氏と栖本氏が棚底地域の知行を巡って争った際の舞台として、人吉地方の有力な大名だった相良氏の重臣が記した八代日記に記録が残っています。約470年前に棚底を巡る抗争が繰り広げられたことが記されており、相良氏はその時期に天草地域の動向を気にしていたことが分かります。また、平成14年度から3年間かけて行った発掘調査では、全ての曲輪で柱穴が見つかったほか、茶の湯道具、基石、海外産の陶磁器が出土しています。平成21年7月23日に、肥後天草地域の政治・軍事の変遷を知る上で貴重な遺跡として国史跡に指定されました。

令和元年度調査では、I郭を囲う横堀の西側末端部を確認できました。平成30年度に東側末端部を確認していたため、この成果と合わせると横堀の範囲を正確に復元することができます。横堀の範囲を発掘調査で確定できたのは県内では初めての事例です。令和2年度調査では、今まで中世の構築か判断がつかなかった石積を悉皆調査し、全て中世のものではないと分かりました。

天草市教育委員会では、令和2年度から整備基本設計を基に事業を進めており、見学路の整備をはじめ、眺望や遺構保護の支障となる樹木を伐採するなどしています。本調査で明らかになった成果が史跡整備をはじめ、様々な分野で活用されることによって、ふるさと天草への思いを深め、文化財に対する理解の一助となることを願います。

終わりに、調査の実施、指導等に多大なお力添えを賜った関係者、関係機関の皆様に深く感謝申し上げます。

令和4年3月

天草市教育委員会 教育長 石井 二三男

本文目次

第1章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	2
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 第7次発掘調査成果	
第1節 調査の目的	7
第2節 TR101	7
第3節 TR102	8
第4節 出土遺物	11
第4章 石積悉皆調査成果	
第1節 調査の目的	16
第2節 調査成果	16
第5章 総括	
第1節 第7次発掘調査成果と石積悉皆調査の整理	19

図表目次

図1 棚底城跡の位置	4
図2 棚底城跡周辺の遺跡分布	5
図3 トレンチ配置図	7
図4 TR101平面・土層図	9
図5 TR102平面・土層図	10
図6 出土遺物(1)	12
図7 出土遺物(2)	13
図8 出土遺物(3)	14
図9 石積分布図	18
図10 棚底地区の防風石垣とコグリ	19
表1 出土遺物一覧	15
表2 石積一覧	17

凡 例

1. 本書は、令和元年度及び令和2年度に天草市教育委員会が棚底城跡調査整備事業として実施した棚底城跡第7次発掘調査及び石積悉皆調査の成果をまとめたものである。
2. 報告書作成作業は令和3年度に実施している。
3. 調査の実施にあたっては、文化庁国庫補助である市内遺跡発掘調査等事業を活用した。
4. 本書に掲載した座標は世界測地系に基づくものである。
5. 調査については、第7次発掘調査時に史跡棚底城跡整備検討委員会、文化庁、熊本県教育庁教育総務局文化課、山崎純男氏、奈良崎和典氏の指導を受けた。
6. 発掘調査によって得られた出土遺物等は天草市文化財収蔵庫に保管している。
7. 本書の執筆と編集は宮崎俊輔が行った。注記と接合は岩見桂子、トレース作業は森友李夏が一部行った。

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

天草市では、旧天草郡倉岳町(以下、旧倉岳町と称す)の頃から棚底城跡の測量調査・発掘調査に取り組んできた。旧倉岳町の町史編纂事業の一環として平成14年度から始まった調査は当初、縄張り把握のための測量調査とI郭(主郭)の遺構の残存状況の確認のためのトレンチ調査を実施していた。この際に岩盤を鑿状のもので掘り込んで成形したと思われる柱穴等が多数確認され、遺構の存在が確認された。これを機に発掘調査を平成16年度まで実施し、I郭は全域、II～VIII郭はトレンチ調査を行った。平成21年7月23日には国指定史跡となり、平成23年度に『史跡棚底城跡保存管理計画書』、平成28年度には『史跡棚底城跡整備活用基本計画書』を策定した。これらに基づく史跡整備基本設計を行うため、平成29年度から遺構の確認を目的とする発掘調査を実施することとなった。

過年度調査で全ての曲輪に岩盤を掘削した遺構が検出され、軟質の岩盤を加工・利用していたことが確認された。また、出土遺物は14世紀～16世紀の幅であり、一般的な中世城跡に比べると海外産の陶磁器が多いことが特徴として挙げられる。遺物で特に注目されるのは、石製風炉や天目碗等の茶の湯道具とベトナム産陶磁器、タイ産陶器である。これらの成果は熊本県内にはあまり類例がない。また、平成27・28年度に行った発掘調査ではI郭西部の横堀と土塁の延長が確認されるとともに、竪堀の延長も確認された。I郭にある土塁状の高まりは普請する段階で意図的に設けられていることも判明している。平成29・30年度の調査では、I郭東側の土塁と横堀の末端を確認できた。

史跡棚底城跡整備検討委員会に調査成果を報告したところ、「棚底城跡の特徴の1つである横堀の末端処理の仕方をI郭西側も確認し、竪堀と連結しているか検証すべきである。」「第5次発掘調査時に棚底城に伴う石積と評価がされているが、現存している石積と比較して再検討したらどうか。中世段階の石積の可能性は低いのではないか。」と課題を示された。これを受け、I郭西側の横堀末端確認のための発掘調査を令和元年度に、史跡内の石積悉皆調査を令和元・2年度に実施することとなった。なお、石積悉皆調査は史跡棚底城跡整備活用基本計画書において「……石積はき損の危険性が看取されるものもあるため、石積カルテ等の分布・実態調査を実施した上で、危険度を判別し、緊急度が高いものから、崩落防止の措置を順次実施する。」と明記されていることから、石積カルテの作成を行うために実施するものである。調査範囲は史跡指定地の内、私有地の部分は対象から除外した。また、全て簡易測量と写真撮影で対応し、図面作成等を行っていない。

第2節 調査組織

令和元年度（第7次）発掘調査・石積悉皆調査

調査主体	天草市教育委員会
調査責任者	教育長 石井二三男
調査総括	文化課長 丸林眞吾
調査事務	文化課課長補佐（世界遺産・文化財係長） 村田清也 文化課世界遺産・文化財係参事 松本博幸
調査担当	文化課世界遺産・文化財係学芸員 宮崎俊輔
作業員	小浦宇生雄、駒崎隆義、橋本仁志、村津俊信、森永恵美
調査指導	【史跡棚底城跡整備検討委員会】 鶴嶋俊彦、歳川喜三生、稲葉継陽、山尾敏孝、田中哲雄、鈴木智大、 堀川昭三郎、稲津千明 【文化庁】中井將胤 【熊本県教育庁教育総務局文化課】木村龍生 【有識者】奈良崎和典、山崎純男
調査協力	【天草市倉岳支所】福本英樹 【天草市秘書課広報広聴係】佐々木一美 【天草市地域おこし協力隊】佐藤静香

令和2年度石積悉皆調査

調査主体	天草市教育委員会
調査責任者	教育長 石井二三男
調査総括	文化課長 丸林眞吾
調査事務	文化課課長補佐（世界遺産・文化財係長） 村田清也 文化課世界遺産・文化財係参事 松本博幸
調査担当	文化課世界遺産・文化財係学芸員 宮崎俊輔
調査指導	【史跡棚底城跡整備検討委員会】 鶴嶋俊彦、歳川喜三生、稲葉継陽、山尾敏孝、田中哲雄、鈴木智大、 堀川昭三郎、稲津千明 【熊本県教育庁教育総務局文化課】木村龍生
調査協力	【天草市倉岳支所】稲田正一郎
作業員	小浦宇生雄、駒崎隆義、橋本仁志、村津俊信、森永恵美

令和3年度調査報告書作成作業

作業主体	天草市教育委員会
作業責任者	教育長 石井二三男

作業総括	文化課長 唐田嗣久
作業事務	文化課課長補佐(文化振興・文化財係長) 植木剛 文化課文化振興・文化財係参事 松本博幸
作業担当	文化課文化振興・文化財係学芸員 宮崎俊輔
作業助手	文化課文化振興・文化財係会計年度任用 岩見桂子 文化課世界遺産・キリシタン資料館係会計年度任用 森友李夏

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

棚底城跡は熊本県天草市倉岳町棚底字尾崎所在の中世城跡である。天草市は熊本県の南西部に位置し、東シナ海・有明海・八代海に囲まれた大小120程度の島々で構成されている。倉岳町は天草上島の南側にあり、天草市最高峰の倉岳を有する。冬には通称「倉岳おろし」と呼ばれる非常に強い北風が吹くことで知られ、麓の棚底地区には算木積みで防風石垣が組まれた独特の集落景観が広がる。棚底地区は扇状地であるため、大型の礫が豊富に取れ、水はけが良い。

気候は温暖で、平均気温は例年17度前後であり、冬場の平均気温も10度前後にとどまっている。降雨は概して少なく、県内で降水量の多い阿蘇や人吉地方とは対照的である。

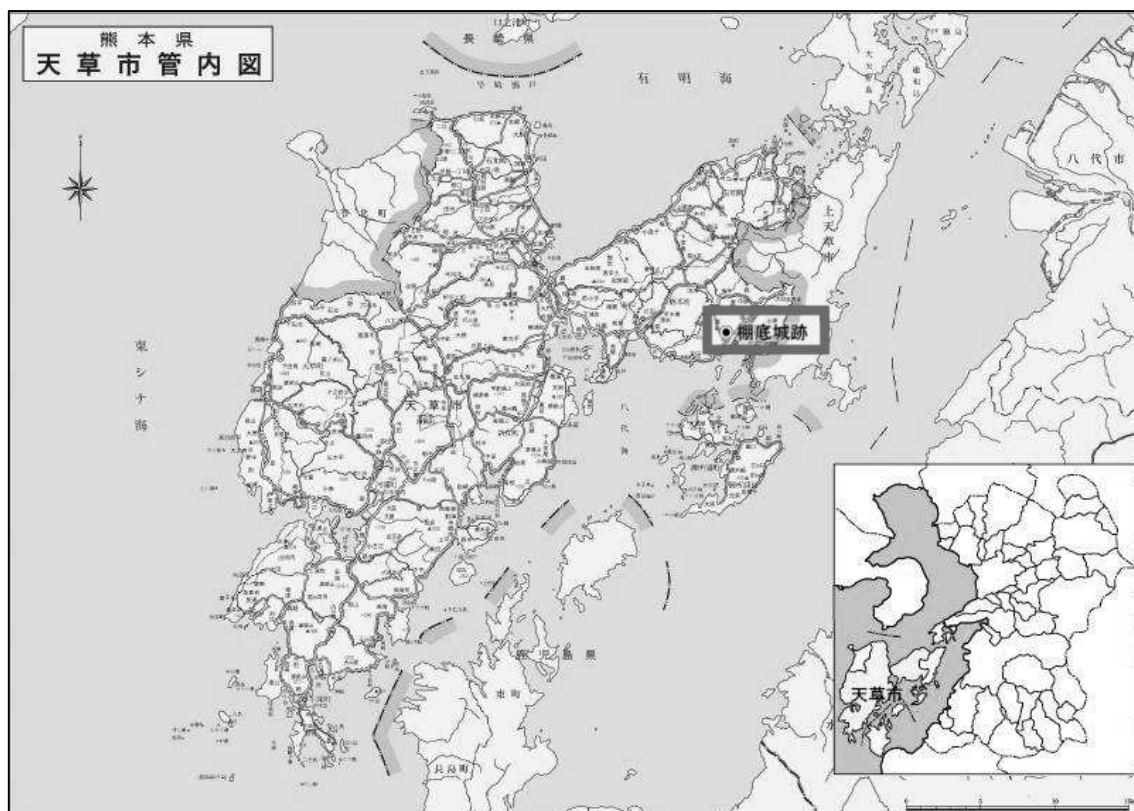


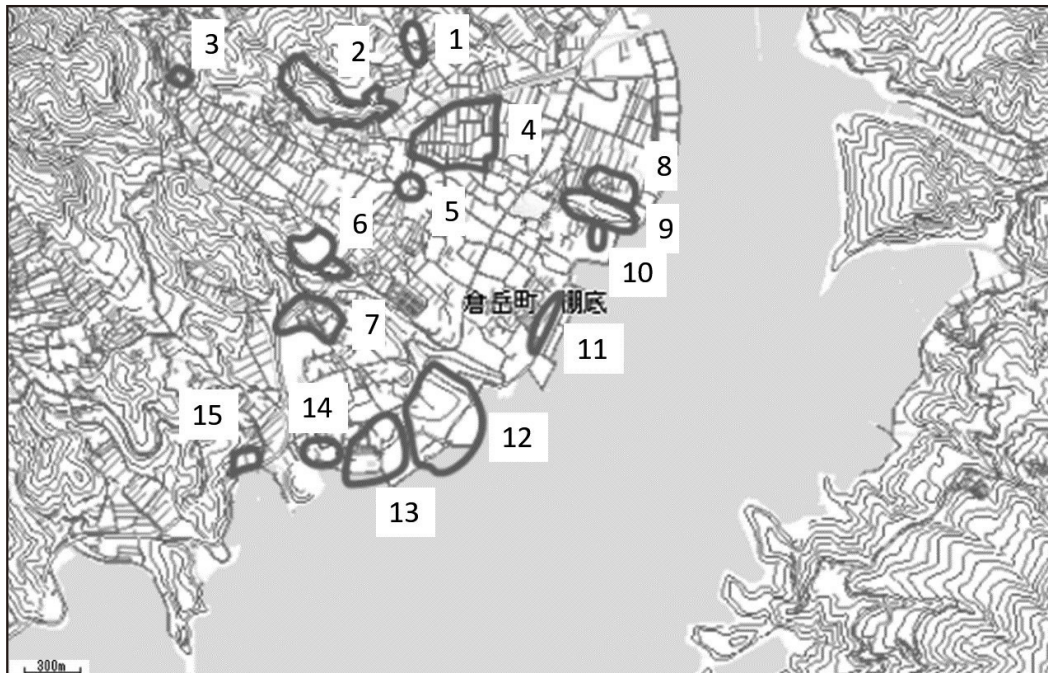
図1：棚底城跡の位置

第2節 歴史的環境

棚底城跡周辺は図2に示すように現在の海岸沿い及び国道沿い、山間部にそれぞれ遺跡の分布が集中している。縄文時代の遺跡が広い範囲に多く、市指定史跡「宮崎石棺墓群」のように古墳時代の遺跡も散見され、中世に属すと考えられる遺跡は棚底城跡のほかには大権寺遺跡と八竜遺跡のみとなっている。し

かし、棚底地区の住民によれば畑からよく茶碗の破片が出るという話もあることから、現在の集落と中世の集落が重なっている可能性もあることは留意しておきたい。いずれにせよ、棚底城跡周辺の遺跡については発掘調査等が行われていないため、不明な点が多い。

中世については、大権寺遺跡が重要となる。従来から石塔記念銘として天草最古となる延文3年(1358)をもつ石塔部材を筆頭に多数の石塔残欠があることで知られ、棚底城跡の築城主体と関わる可能性をもつ遺跡である。また、棚底城跡と扇状地を挟んで向かい合う西側丘陵部は地元では「城山」と呼ばれている。明確な遺構は確認できないが頂上部のみ削平されている。倉岳町所在の明確な城跡としては、宮田城跡や名桐城跡がある。宮田城跡には塹堀、土橋等の遺構が良好に残っており、表面採集された陶磁器から15～16世紀後半に比定されよう。名桐城跡は全長350mに及ぶ細長の縄張りで、東西に走る尾根上に連続する3つの丘を主要な曲輪として削り出し、周囲に塹堀を施している。名桐城跡の近くには「家久栄」という地名があり、八代日記に記載のある「藤河柁」と関係すると考えられている。これらの城跡は棚底城跡に隣り合っており、上津浦氏及び栖本氏による棚底を巡る抗争の中で機能していたと思われる。



- 1. 古野遺跡 2. 棚底城跡 3. 大権寺遺跡 4. 山仁田遺跡 5. 歳川遺跡
- 6. 毛首遺跡・浦川遺跡 7. 塔尾遺跡 8. 宮ノ後遺跡 9. 宮崎石棺群 10. 宮崎遺跡
- 11. 八竜遺跡 12. 曙遺跡 13. 小崎遺跡 14. 下塔尾遺跡 15. 小嶋遺跡

図2：棚底城跡周辺の遺跡分布

近世になると、豊臣秀吉による九州征討後には小西行長の下に置かれた。いわゆる天草五人衆（天草氏・大矢野氏・上津浦氏・志岐氏・栖本氏）と小西行長の間で天正17年（1589）に勃発した通称・天正天草合戦を経て、改めて小西行長の統治下におかれ、在地領主として地域支配を行うこととなった。文禄・慶長の役にも参戦するが、中世に導入されたキリスト教が諸島全域に拡大し、コレジヨの誘致等が行われている。しかし、棚底周辺についての歴史は詳らかでなく、隣接する宮田村までは栖本氏がキリシタンになった影響で宣教が行われたことまでしか分かっていない。

第3章 第7次発掘調査成果

第1節 調査の目的

I郭西側の横堀の処理の仕方を確認し、縦堀と連結しているか否かを検証するため、TR101とTR102の2箇所を掘削した(図3)。

平成30年度に実施した第6次発掘調査でI郭東側の横堀と土塁の末端を確認したが、史跡整備にあたり、西側の横堀と土塁の末端処理も確認すべきという史跡棚底城跡整備検討委員会からの指導を受けて行ったものである。

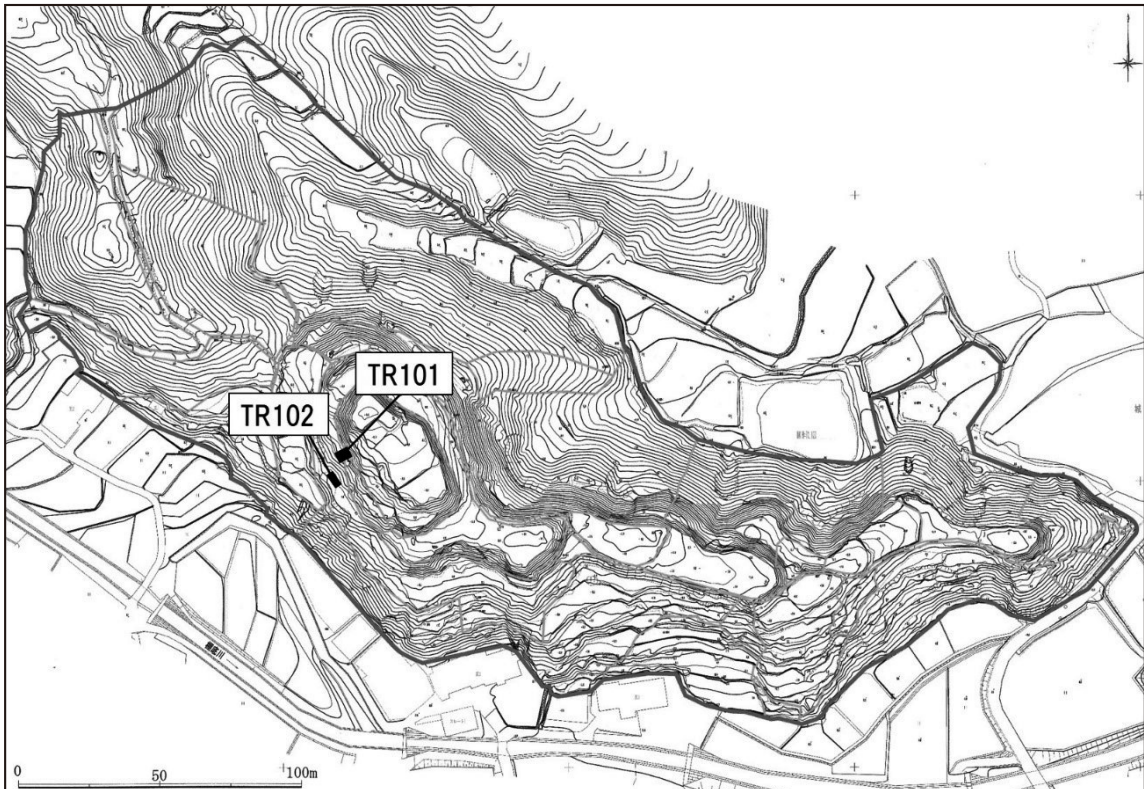


図3：トレンチ配置図

第2節 TR101(図4)

I郭西側に4.0m×3.0mで設定した。3重の横堀と土塁の中で最もI郭寄りのものが検出されると想定したものである。横堀を検出することはできたが、I郭側からの崩落土によって破壊されていることが判明した。土塁は確認されなかった。

横堀が検出されたのは、P1-P3土層である。具体的な横堀の形状を確定するには至らなかったが、過年度調査の成果から箱堀もしくは薬研堀と推定できる。しかし、平成30年度に実施した第6次発掘調査で検出した横堀が岩盤をほぼ90度に掘り込んでいたのに対して、今回検出されたものは、底部に向かって緩やかに落ち込む形状であり、岩盤に整形の痕跡も確認できなかった。ま

た、土塁についても、トレンチのすぐ南側は崖となっているため、トレンチ外に土塁がある可能性はその造成する空間がとれないため極めて低いといえる。

次に、P 2 - P 4 土層をみると、明灰色礫層が大半を占めており、I 郭側からの崩落土と考えられる。この層は対面土層になる既述の P 1 - P 3 土層には見られない。また、横堀の痕跡も確認できない。そのような中であって、トレンチ南側に位置する P 3 - P 4 土層では広い範囲に明灰色礫層が確認できる。このことから、トレンチ内に限って言えば、I 郭側からの大規模な崩落が P 2 方向から P 3 方向へ斜めに発生したと考えられる。

これらを総合的に鑑みると、TR 1 0 1 内で I 郭西側の横堀は終結しており、土塁は付随していないと結論付けられる。また、I 郭側からの大規模な崩落土も確認できることから現在の切岸は本来のものから大幅に削られており、I 郭が現状より広がったことが第6次発掘調査同様に判明した。横堀の末端処理については、自然地形を利用したものと思われる。

第3節 TR 1 0 2 (図5)

2.0×4.0mで設定した。トレンチすぐ南側にある竪堀の延長確認と TR 1 0 1 で確認した横堀と連結しているかの確認をするためのものである。結論としては、竪堀は検出されなかった。したがって、横堀との連結もしていない。

堆積している土砂は I 郭側からの流れ込みであり、特に遺物が豊富に出土したのは明茶色粘質土層で、15世紀代が大半である。トレンチの約半分を I 郭側から流れてきた岩塊が占めており、地山は粘質が非常に強く移植ゴテやトウガでも歯が立たないほど締まっていた。

以上のことから、TR 1 0 2 では遺構は確認されないため、I 郭西側の横堀は竪堀との連結ではなく、自然地形を利用した末端処理を行っている結論付けた。

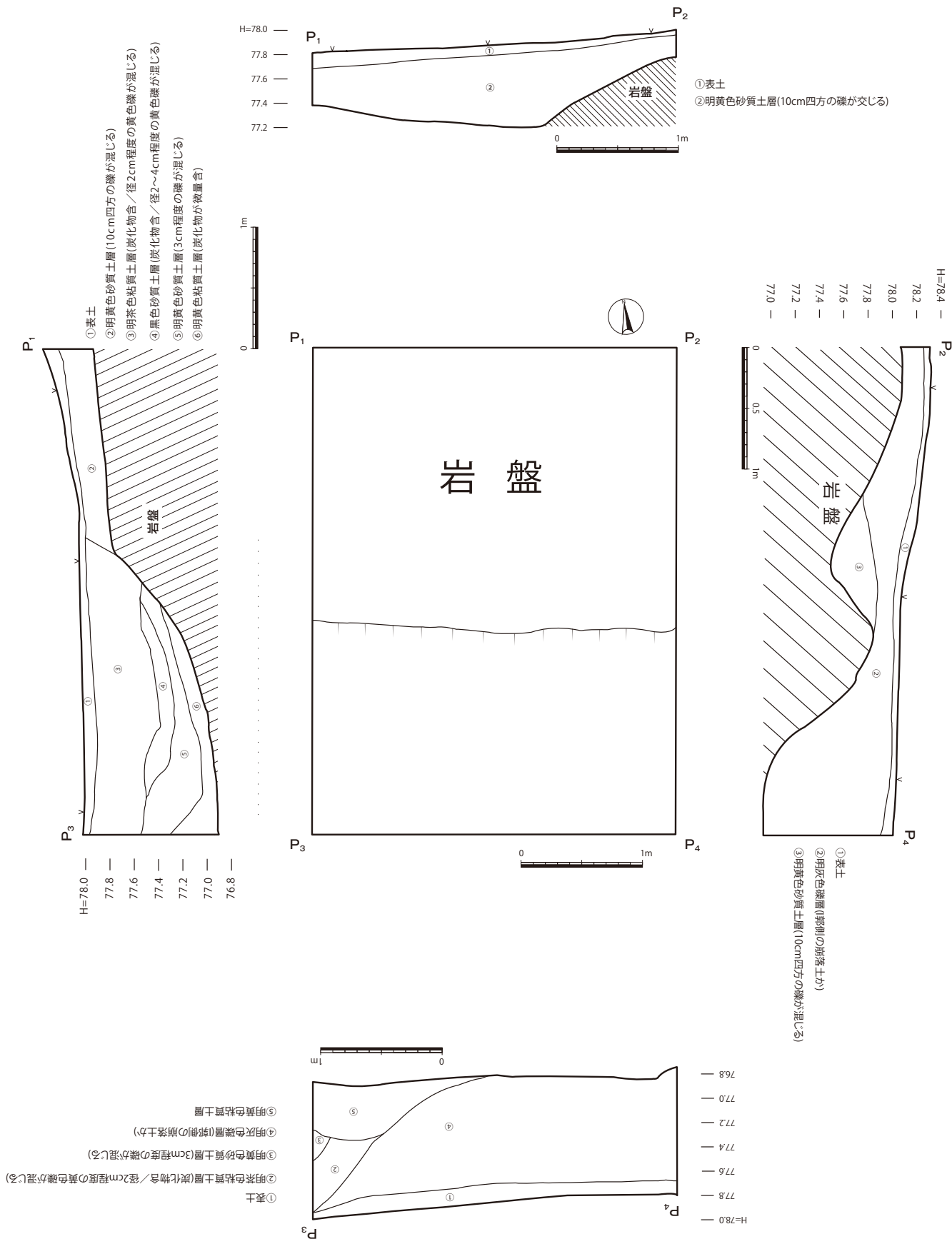


図4：TR101平面・土層図

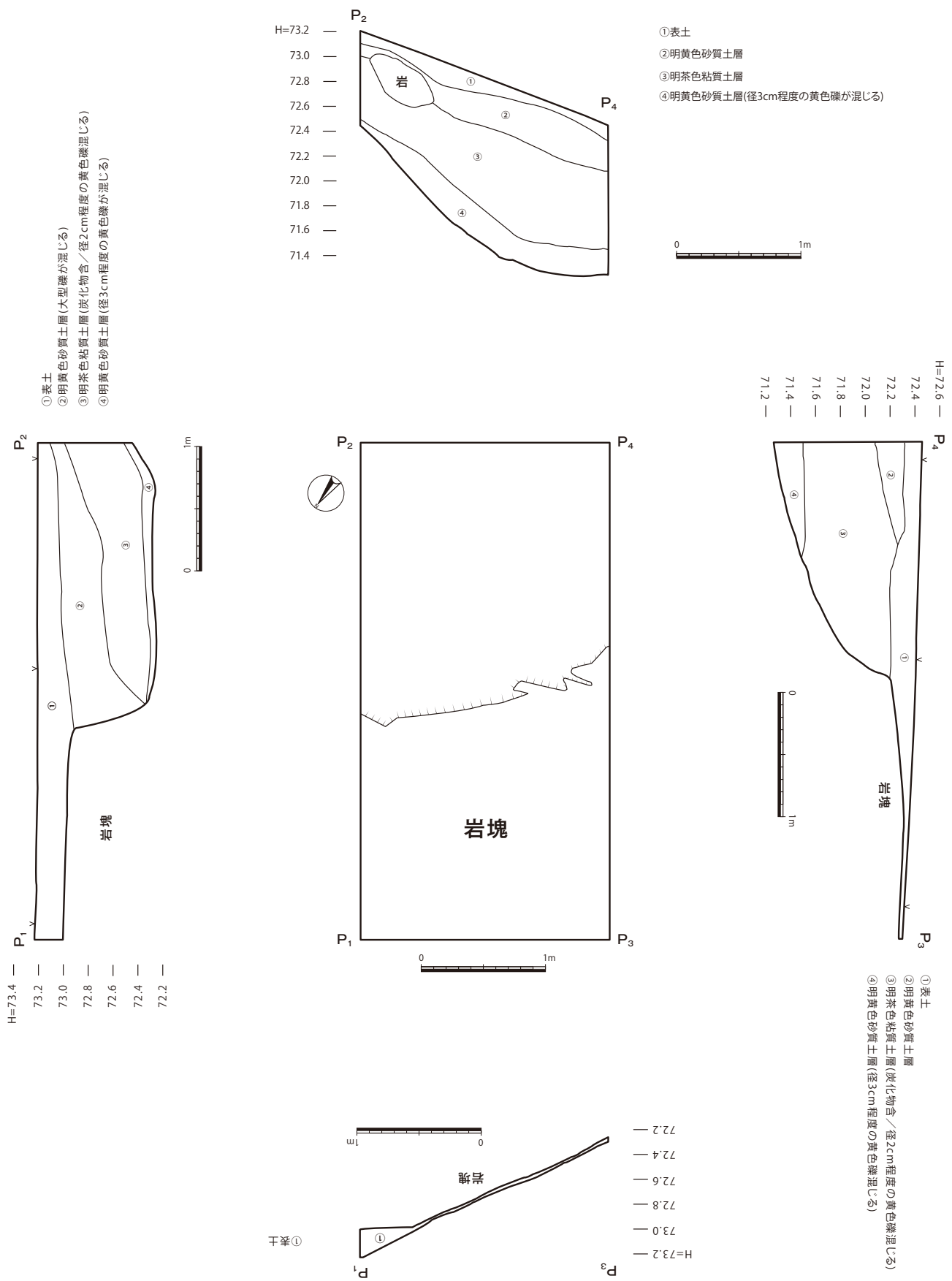


図5：TR102平面・土層図

第4節 出土遺物(図6～8・表1)

TR101から174点、TR102から225点が出土したが、ほとんどが小破片である(表1)。これらの内で図化できるものを掲載した。

No.1は土師器碗の完形で、器高2.1cm、口径8.2cm、底径5.4cm。胎土は緻密で焼成良好。口縁部に煤が付着していることから灯明皿としての使用が想定される。No.2は青磁盤の底部と考えられる。残存高2.5cm、胎土は緻密で焼成良好である。色調は濃い緑色だが、釉薬が剥がれている部分は赤褐色。No.3は土師器碗で、残存高2.4cm、胎土は緻密で焼成良好。内部の底面に煤が付着している。No.4は土師器碗で、器高2.4cm、復元口径8.4cm、底径5.5cm。胎土は緻密で焼成良好。No.5も土師器碗で残存高2.2cm、胎土緻密、焼成良好。No.6は土師器碗の完形である。器高2.0cm、口径7.5cm、底径5.0cmで胎土は緻密で焼成良好。口縁には煤が部分的に付着している。No.7は土師器皿で器高3.4cm、復元口径13.6cm。胎土は緻密で焼成は良好。No.8は蓮弁文がある青磁碗で胎土は緻密で焼成良好。釉剥ぎが一部見られる。No.9は瓦質のすり鉢で、復元口径は16.0cm。胎土は緻密で焼成良好である。No.10・No.11は青磁で、胎土は緻密で焼成良好である。No.12は土師器皿で、器高2.0cm。胎土は緻密で焼成良好。内面がローリングを受けている。No.13も土師器皿で、器高2.1cm、復元口径7.6cm、復元底径4.6cm。胎土は緻密で焼成良好。No.14は青磁碗と思われ、残存高は2.4cm、胎土緻密、焼成良好。No.15は土師器皿で口縁の一部のみ欠けている。器高1.9cm、口径8.8cm、底径5.8cm、胎土緻密で焼成良好である。内面に明瞭な指圧痕がある。No.16は土師器皿で器高3.4cm、胎土緻密、焼成良好。底部から側面にかけてと、口縁内面に煤が付着している。No.17は土師器皿でローリングを受けている。残存高2.3cm、胎土緻密、焼成良好である。No.18は青磁の底部で、胎土緻密の焼成良好。高台底面は施釉されていない。No.19は土師器皿で器高2.8cm、復元口径10.8cm、復元底径5.0cm、ローリングを受けている。No.20は土師器皿の底部で、残存高1.5cm、底径6.0cm。胎土は粗雑で焼成は良好。No.21はTR102付近で表採した蓮弁文がある青磁碗で、残存高3.3cm。胎土は緻密で焼成良好。

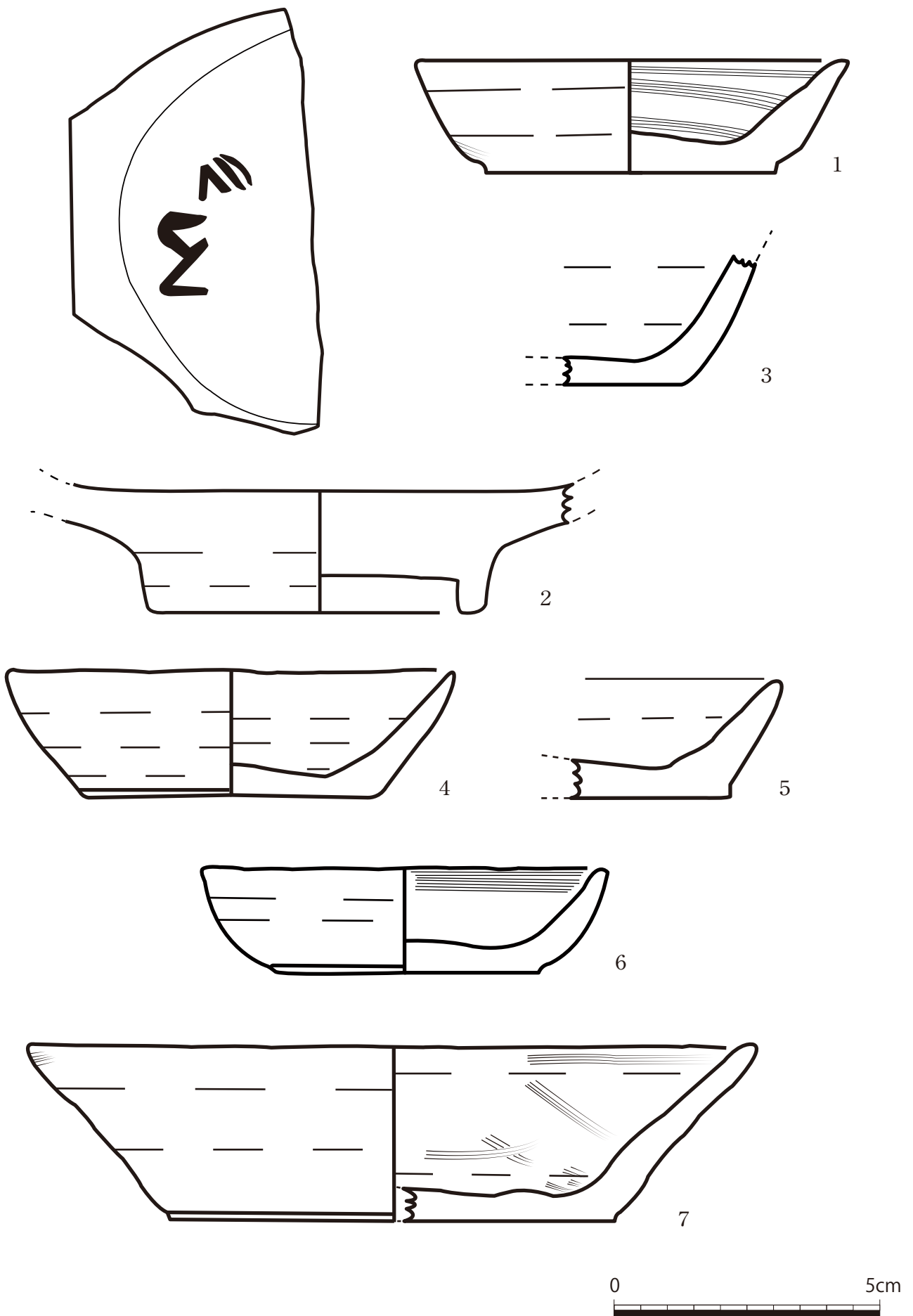


图6：出土遺物（1）

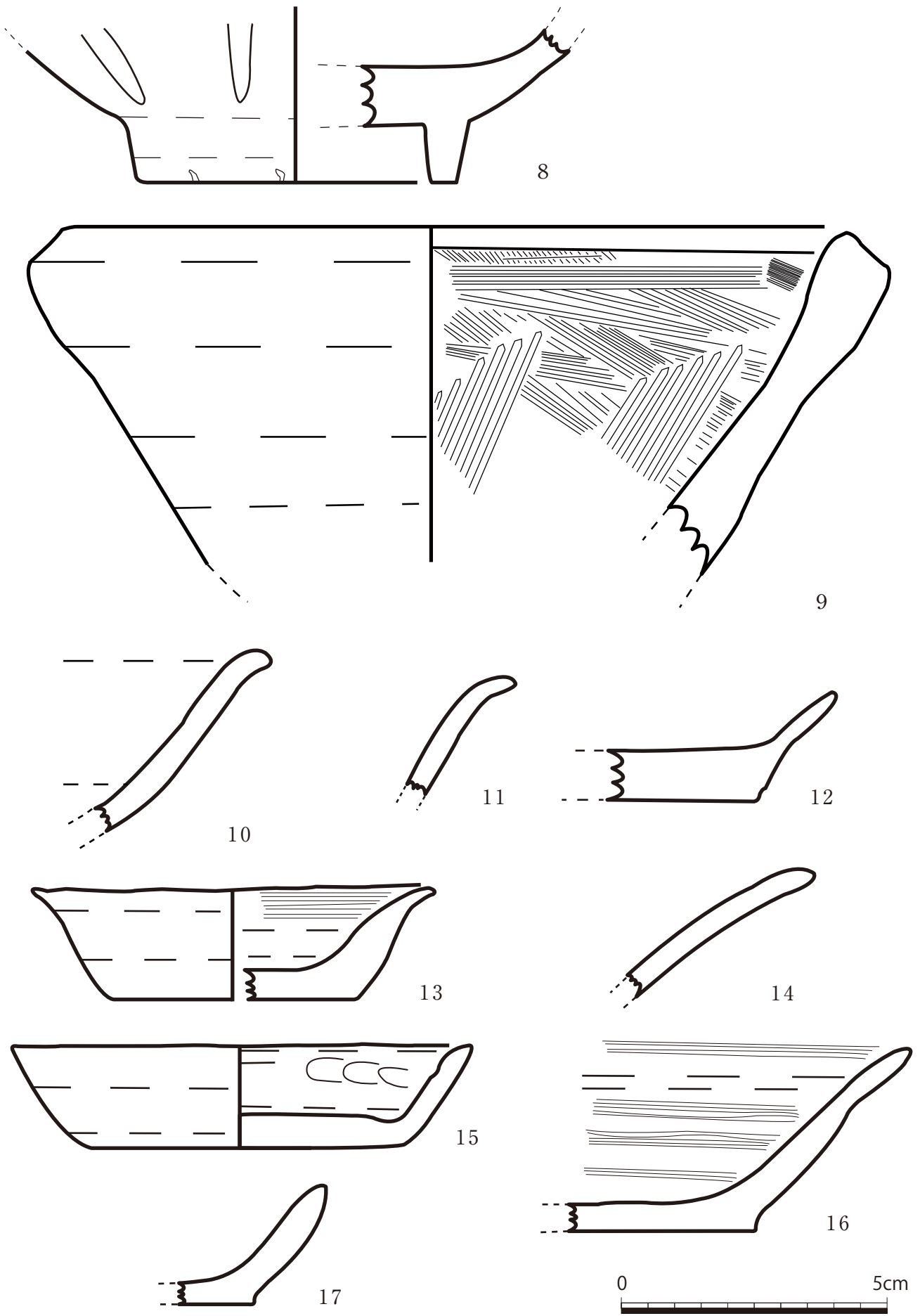


图7：出土遺物（2）

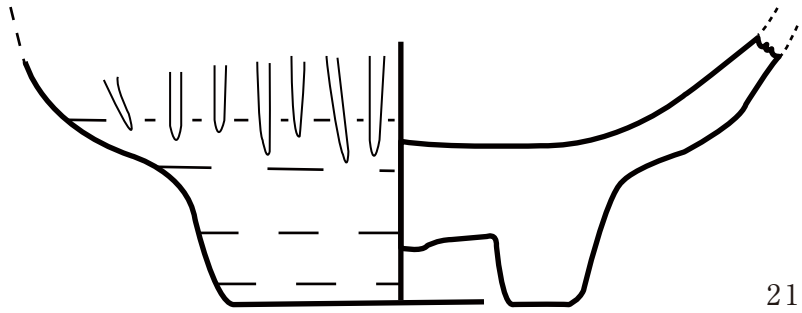
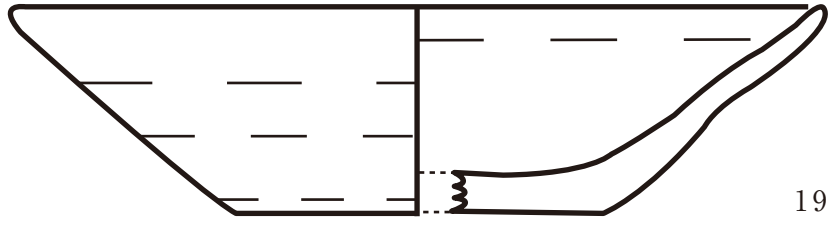


图 8 : 出土遺物 (3)

表 1 : 出土遺物一覧

発掘区	取り上げ番号	内 容	総点数	器 種	実測図番号	写真番号
T R 1 0 1	1	土師器	1	碗	1	1
	2	土師器	1	—	—	—
	3	青磁	1	盤?	2	2
	4	土師器	1	碗	3	3
	5	土師器	1	—	—	—
	6	土師器	1	碗	4	4
	7	土師器	1	—	—	—
	8	土師器	1	碗	5	5
	9	瓦器	1	—	—	—
	10	土師器	1	碗	6	6
	11	瓦器	1	—	—	—
	12	土師器	1	—	7	7
	13	青磁	1	碗	8	8
	表土層	白磁2点、近代陶器3点	5	—	—	—
	2層	白磁1点、青磁11点、 瓦器21点、土師器47点、 青花4点、近代陶器1点、 炭6点、骨3点	94	青磁皿1点 瓦質すり鉢1点	9~11	9~11
	3層	白磁1点、青磁3点、 瓦器3点、土師器41点、 近代陶器1点、炭2点	51	土師器皿2点	12~13	12~13
4層	土師器10点、骨1点	11	—	—	—	

発掘区	取り上げ番号	内 容	総点数	器 種	実測図番号	写真番号
T R 1 0 2	表土層	青磁3点、土師器28点、 瓦器10点、タイ産陶器1点	42	青磁碗1点	14	14
	2層	青磁4点、土師器25点、 瓦器5点	34	—	—	—
	3層	白磁1点、青磁2点、 土師器135点、炭8点、 タイ産陶器1点	142	土師器皿5点	15~20	15~20
	4層	土師器5点	5	—	—	—
	表採	青磁1点、近代陶器1点	2	青磁碗	21	21

第4章 石積悉皆調査成果

第1節 調査の目的

史跡棚底城跡整備活用基本計画書に「導線管理・サイン整備ゾーンに多く点在する石積はき損の危険性が看取されるものもあるため、石積カルテ等の分布・実態調査を実施した上で、危険度を判別し、緊急度の高いものから、崩落防止の措置を順次実施する。」とあることから実施した。

なお、史跡指定地の内、民有地の一部については所有者の承諾を得られなかったため、調査対象としなかった。公有地化した後に行う必要がある。

調査にあたっては、史跡内を踏査し、石積に任意で番号を振った。石積の位置、メジャーによる寸法の簡易計測値、石材の種類、現況写真を記録した。なお、写真については原則として1つの石積につき写真1枚で記録しているが、大きさによっては様々な角度から複数枚掲載して対応し、石積の高さは最も高いところの数値を挙げている。さらに、石積の評価を次のように行った。

- A…著しい破損がなく、土留めの機能を果たしている状態
- B…一部にはらみや欠損があり、崩壊の危険性が高い状態
- C…著しく破損または崩壊し、土留めの機能を果たしていない状態

第2節 調査成果

公有地の範囲内で61箇所の石積を確認した(図9・表2)。ほとんどが安山岩で構築されており、南側斜面に集中的に分布している。A判定3箇所、B判定28カ所、C判定30箇所となっており、ほぼ全ての石積が既に崩壊しているか、その危険性が高い状態である。写真は写真図版編を参照されたい。

石材には矢穴や加工した痕跡はなく、自然石が積み上げられている。安山岩は棚底地区一帯では一般的に見られる石材であることから、城跡の麓から持って上がってきたものであろう。隅石の積み方に法則性はなく、安定性がない。また、石材が抜け落ちている箇所から判断すると、裏込め石もない。加えて、「石積」としているが、No.18やNo.55のように単に1列だけ石が並べられて、特に積まれていない例もある。したがって、ある特定の指導者のもとで構築されたものではなく、構築者それぞれで独自に積み上げたものと考えられる。石積の分布としては、既述したように南側斜面に集中している一方で、北側にはまばらに分布しているに過ぎない。これは、南側の日当たりが良く、畑を利用した栽培には適した場所であるからと推定される。平場を石積が囲うように造られていることも示唆的である。また、No.47のように塹堀を塞ぐように構築されたものもあることから、廃城後に積まれたことは明白である。

以上のことから、石積は全て畑の開墾に伴ったものと判断した。

表 2 : 石積一覧

番号	寸法 (幅×高さ) m	石 材	判定
1	1.90×0.40	安山岩	C
2	5.35×0.85	安山岩	C
3	9.45×1.40	安山岩	C
4	9.15×1.20	安山岩	C
5	9.15×0.50	安山岩	C
6	5.48×0.80	安山岩	B
7	17.85×1.16	安山岩	B
8	5.15×1.10	安山岩	B
9	2.60×0.70	安山岩	B
10	2.50×1.00	安山岩	C
11	11.90×1.20	安山岩	B
12	22.45×1.02	安山岩	B
13	51.2×0.96	安山岩	B
14	13.10×1.10	安山岩	C
15	14.20×0.50	安山岩	B
16	6.25×0.90	安山岩	A
17	1.10×0.34	頁岩・安山岩	B
18	7.50×0.34	頁岩・安山岩	C
19	0.70×1.70	安山岩	C
20	3.70×0.80	安山岩	C
21	4.80×1.20	安山岩	C
22	3.85×1.25	安山岩	B
23	2.10×0.67	安山岩	C
24	4.10×0.90	安山岩	C
25	9.80×0.70	安山岩	B
26	1.70×0.95	安山岩	B
27	1.85×1.00	安山岩	B
28	1.80×0.78	安山岩	C
29	5.80×0.85	安山岩	B
30	14.40×1.04	安山岩	C
31	2.58×0.67	安山岩	C
32	2.70×0.40	安山岩	C
33	1.70×0.70	安山岩	C
34	5.20×1.10	安山岩	C
35	3.15×0.90	安山岩	B
36	9.45×0.95	安山岩	C
37	2.40×0.70	安山岩	C
38	10.77×0.90	安山岩	C
39	13.00×1.55	安山岩	B
40	10.40×1.80	安山岩	B
41	13.90×1.70	安山岩	B
42	2.60×0.90	安山岩	B
43	9.10×1.60	安山岩	B
44	3.30×0.90	安山岩	B
45	4.30×1.10	安山岩	C
46	12.00×0.80	安山岩	C
47	20.00×1.50	安山岩	B
48	7.00×1.00	安山岩	C
49	3.90×0.70	安山岩	C
50	1.50×0.50	安山岩	B
51	5.00×2.30	安山岩	C
52	2.30×1.30	安山岩	B
53	2.80×0.60	安山岩	B
54	3.60×1.00	安山岩	C
55	2.90×0.30	安山岩	A
56	1.10×1.50	安山岩	B
57	2.00×0.60	安山岩	B
58	3.70×0.60	安山岩	B
59	22.20×1.60	安山岩	A
60	3.40×0.50	安山岩	C
61	2.90×0.30	安山岩	C

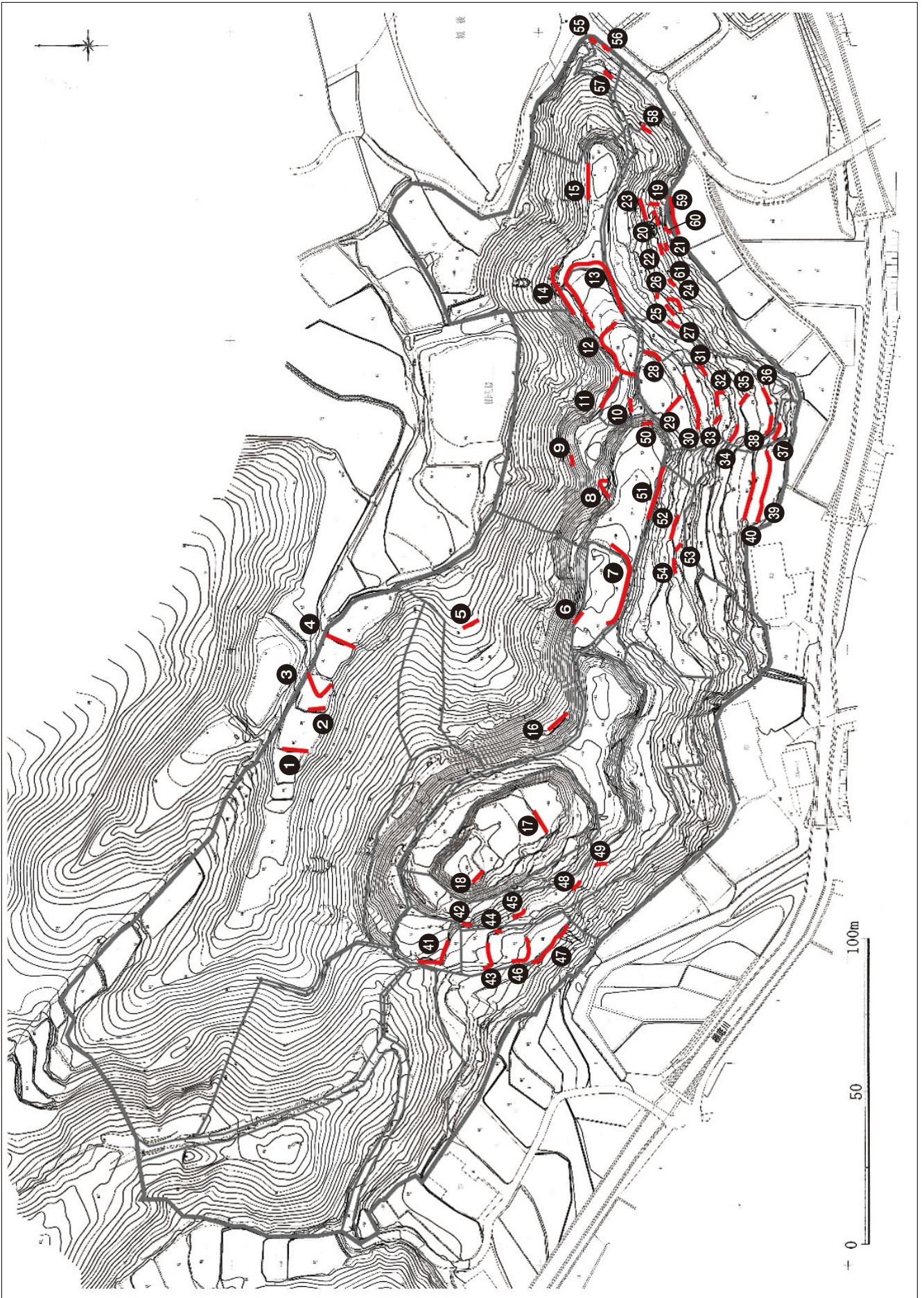


图 9：石積分布図

第5章 総括

第1節 第7次発掘調査成果と石積悉皆調査の整理

第7次発掘調査の目的はI郭西側の横堀の末端処理方法を確認することと、
竪堀の延長を確認することであった。結果として、I郭西側の横堀は崩落土に
よって破壊されているため、末端処理方法を確定することは叶わなかったが、
検出状況や竪堀の延長がないことから自然地形を利用していると推定できた。
いずれにせよ、I郭を囲う横堀の範囲は確定できたといえよう。

石積悉皆調査では、史跡内に61箇所の石積を確認した。しかし、その多くは
既に崩壊もしくはその危険性が高いものである。既述したように石材はほぼ安
山岩であるが、一部に風化して粉々になった頁岩も使用されている。これらは
角がとれてかなり摩耗している。棚底地区は扇状地であり、その構成物は倉岳
で発生する崩落及び土石流、棚底川の氾濫等でもたらされたものである。その
ため、棚底地区では安山岩や砂岩が豊富に採集され、それらを使った防風石垣
やコグリ（農業用水路）等によって独特の農村景観が広がっていることで有名
である（図10）。棚底地区を含む倉岳町域は、その大部分が古第三系教良木層と
呼ばれる頁岩（泥岩）と砂岩の互層地盤で成り立ち、特に頁岩が卓越する地域
である。また、扇状地の地下には数mにわたって礫層が確認され、大量の安山
岩質貫入岩が堆積している。これは、倉岳中腹周辺で山体主体の教良木層中
に貫入した火成岩が崖面に露頭、崩落し、土石流等として運ばれてきたもので
ある。

石積の位置は南側斜面に集中しており、曲輪や平場の地目は畑のところが多
く、指定面積の12%程度を占めている。指定地内には公衆用道路及び里道が
全体の2%を占めているが、これは戦後に耕作用機械運搬と人の交通のために
便宜的に通したものである。積み方に法則性等はないことから中世段階で構
築されたものではない。

したがって、石積は土石流等によって麓に運ばれてきた石材を使用しており、
畑の開墾に伴って構築されたものと判断した。



図10：棚底地区の防風石垣とコグリ

写真図版編



TR101 設定状況



TR101 完掘状況



TR101 P1-3 土層



TR101 P2-4 土層



TR101 P3-4土層



TR101 P1-2土層



1



3



2-①



2-③



2-②



4



5



6



7



8-①



8-②



9



10



11



12



13



TR102設定状況



TR102完掘状況



TR102 P2-4土層



TR102 P3-4土層



14



15



16



17



18



19



20



21-①



21-②



21-③



No. 1



No. 2



No. 3 - 1/2



No. 3 - 2/2



No. 4



No. 5



No. 6



No. 7 - 1/5



No.7 - 2/5



No.7 - 3/5



No.7 - 4/5



No.7 - 5/5



No.8



No.9



No.10



No.11 - 1/2



No.11- 2/2



No.12



No.13- 1/10



No.13- 2/10



No.13- 3/10



No.13- 4/10



No.13- 5/10



No.13- 6/10



No.13- 7/10



No.13- 8/10



No.13- 9/10



No.13- 10/10



No.14- 1/5



No.14- 2/5



No.14- 3/5



No.14- 4/5



No.14- 5/5



No.15- 1/5



No.15- 2/5



No.15- 3/5



No.15- 4/5



No.15- 5/5



No.16- 1/2



No.16- 2/2



No.17



No.18- 1/3



No.18- 2/3



No.18- 3/3



No.19



No.20



No.21



No.22



No.23- 1 / 2



No.23- 2 / 2



No.24



No.25- 1 / 3



No.25- 2 / 3



No.25- 3 / 3



No.26



No.27



No.28



No.29



No.30- 1 / 4



No.30- 2 / 4



No.30- 3 / 4



No.30- 4 / 4



No.31



No.32



No.33



No.34



No.35



No.36- 1 / 3



No.36- 2 / 3



No.36- 3 / 3



No.37



No.38- 1 / 3



No.38- 2 / 3



No.38- 3 / 3



No.39- 1 / 3



No.39- 2 / 3



No.39- 3 / 3



No.40- 1 / 4



No.40- 2 / 4



No.40- 3 / 4



No.40- 4 / 4



No.41- 1 / 4



No.41- 2 / 4



No.41- 3 / 4



No.41- 4 / 4



No.42



No.43- 1 / 4



No.43- 2 / 4



No.43- 3 / 4



No.43- 4 / 4



No.44



No.45- 1 / 2



No.45- 2 / 2



No.46- 1 / 5



No.46- 2 / 5



No.46- 3 / 5



No.46- 4 / 5



No.46- 5 / 5



No.47- 1 / 10



No.47- 2 / 10



No.47- 3 / 10



No.47- 4 / 10



No.47- 5 / 10



No.47- 6 / 10



No.47- 7/10



No.47- 8/10



No.47- 9/10



No.47- 10/10



No.48- 1 / 2



No.48- 2 / 2



No.49



No.50



No.51



No.52



No.53



No.54



No.55



No.56



No.57



No.58



No.59- 1 / 5



No.59- 2 / 5



No.59- 3 / 5



No.59- 4 / 5



No.59- 5 / 5



No.60



No.61

報告書抄録

ふりがな	くにしていしせきたなそこじょうあと							
書名	国指定史跡棚底城跡Ⅵ							
副書名	令和元・2年度調査（第7次発掘・石積悉皆調査）							
巻次								
シリーズ名	天草市文化財調査報告書							
シリーズ号	第11集							
編著者名	宮崎 俊輔							
編集機関	天草市教育委員会							
所在地	〒863-8631 熊本県天草市東浜町8番1号							
発行年月日	2022年3月18日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
棚底城跡	熊本県 天草市 倉岳町	43215		32度 24分 52秒	130度 20分 2秒	7次：2019.8.2 石積：2020.8.3 ～ 7次：2020.1.29 石積：2020.11.20	7次： 20.00	学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
棚底城跡	中世城館	室町時代 ～ 戦国時代	横堀	土師器・青磁・白磁・ 青花・瓦質土器・ タイ産陶器等	
要約	<p>史跡棚底城跡は中世城跡で、「天草五人衆関連城郭群(仮)」の取組みの第1弾として指定を受けた。現在は整備事業を行っている。</p> <p>第7次発掘調査ではI郭西側に延伸している横堀と土塁の終結点を確定した。第6次発掘調査で東側の終結点を確定しているため、正確な復元整備を行えることとなった。また、横堀の範囲を確定できたのは県内では初めての事例である。</p> <p>石積悉皆調査は史跡内に点在する石積を全て写真記録し、中世のものはないと判断した。</p>				

天草市文化財調査報告書第 11 集

国指定史跡棚底城跡Ⅵ

令和元・2 年度調査(第 7 次発掘・石積悉皆調査)

2022 年 3 月 18 日発行

編集：天草市観光文化部文化課

〒863-8631 熊本県天草市東浜町 8-1

Tel. 0969-32-6784

発行：天草市教育委員会 〒863-8631 熊本県天草市東浜町 8-1

印刷：株式会社 印刷センター

